令和２年 10 月 22 日
教育委員会 10 月定例会
報告事項
美術館運営課

横須賀美術館への美術品等の寄贈について

美術品所蔵家から寄贈の申し入れ及び市役所内の他部課より所管替の申し入れがあった美術品等について、美術品評価委員会による審議を行いました。

１　申し入れを受けた作品について（作品の詳細については別紙）

（１）寄贈

No.	分類	作家名	作品名	寸法（cm）	寄贈者
1	日本画	鈴木竹柏	烟雨	53.0×45.0	個人
2	日本画	鈴木竹柏	耀	73.0×60.6	
3	日本画	鈴木竹柏	夕晴れ	38.3×45.5	
4	油彩	淀井彩子	シャッムンナシームの祭り（そよ風の匂い）	33.2×45.2	個人
5	油彩	淀井彩子	SOUTH I.	24.2×33.0	
6	素描	若林奮	〈89-25〉ほか Valleys 関連ドローイング 160 点		
7	素描	森芳雄	スケッチブック	40.0×33.6	個人
8	立体	土谷武	蝉 V	17.0×60.0×28.5	個人
9	立体	髙木修	Untitled	150.0×401.0×40.0	個人
10	写真	高田安規子・政子	修復（通路）	50.9×76.5	個人
			修復（中庭）	50.9×76.5	
11	日本画	朝井閑右衛門	鍾馗之図	135.0×59.0	個人
12	日本画	朝井閑右衛門	副島昇像	27.0×23.5	
13	日本画	朝井閑右衛門	副島昇像	27.0×23.5	
14	資料	朝井閑右衛門	副島昇あて書簡	17.5×39.5	
15	資料	朝井閑右衛門	副島昇あて葉書　7 点		
16	資料	(伝)朝井閑右衛門	旧副島家襖絵　12 点		
17	資料	(伝)朝井閑右衛門	油彩［動物たち］5 点		
18	資料		朝井閑右衛門関連資料（その他）　6 点		

（２）所管替

No.	分類	作家名	作品名	寸法（cm）	所管元
19	日本画	月岡榮貴	逢瀬（源氏物語）	188.5×248.5	秘書課
20	油彩	猪瀬踏花	北の春	91.0×116.5	南処理工場
21	油彩	猪瀬踏花	池畔残雪（横浜三渓園）	53.0×65.3	
22	油彩	猪瀬踏花	犬吠埼	52.0×60.6	

（３）美術館図書室資料から美術作品扱いに変更

No.	分類	作家名	作品名
23	版画	シャガール，マルク	オデュッセイア　全２巻

2　美術品評価委員会の審議結果について

寄贈の申し入れ等のあった上記作品等について調査を行い、美術品 18 件と資料５件を美術品評価委員会において取得及び評価の審議を行いました。

（１）開 催 日　令和２年 10 月１日（木）

（２）場　　所　横須賀美術館ワークショップ室ほか

（３）審議内容　鈴木竹柏作品「烟雨（えんう）」ほか寄贈候補の作品・資料 18 件 204 点、所管替候補の作品５件についての取得及び評価

（４）評価結果　寄贈候補作品および資料のうち、22 件 208 点について取得が適当であり、総評価額を 40,950,000 円とする評価がなされた。なお、No. 21 については、保存状態が悪いため受入不可とされた。No. 14 から 18 については、資料であるため評価額なしとされた。

（評価額の内訳）

寄贈		寄贈		管理替	
No.	評価額（円）	No.	評価額（円）	No.	評価額（円）
1	3,000,000	10	900,000	19	5,000,000
2	3,000,000	11	500,000	20	300,000
3	3,000,000	12	50,000	21	（受入不可）
4	1,300,000	13	50,000	22	150,000
5	1,300,000	14	—	23	7,500,000
6	7,200,000	15	—		
7	1,200,000	16	—		
8	1,500,000	17	—		
9	5,000,000	18	—	計	40,950,000

（５）委員名簿

	氏　名	所　　属　　等
委員長	新畑　泰秀	石橋財団アーティゾン美術館　学芸課長
委　員	小泉　淳一	茨城県近代美術館　学芸顧問
委　員	長門　佐季	神奈川県立近代美術館　企画課長
委　員	光田　由里	DIC 川村記念美術館　学芸ｸﾞﾙｰﾌﾟﾏﾈｼﾞｬｰ
委　員	山梨　絵美子	東京文化財研究所　副所長

3　作品の活用スケジュール

No. 6 若林奮によるドローイングは、美術館前庭に設置されている彫刻《Valleys》の関連作品であり、今後の作品研究・紹介に活かしていきます。

No. 9 髙木修作品、No. 10 高田安規子・政子の作品は、ともに近年の展覧会で紹介したものであり、今後は所蔵品展等で紹介していきます。

No. 11～18 の朝井閑右衛門関連の作品・資料は、横須賀と朝井とを結びつける役割をはたした副島昇医師の旧蔵品であり、今後の朝井研究に活かしていきます。

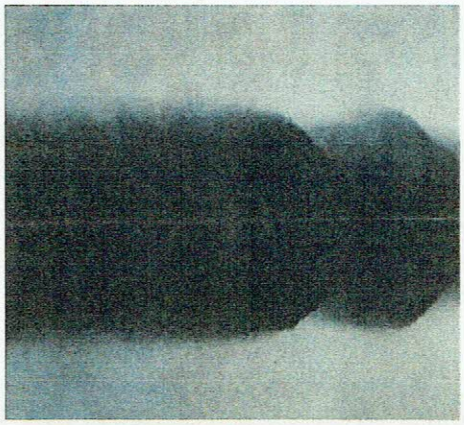
その他の作品も、美術館の所蔵作品として、今後の所蔵品展等において活用していきます。

別紙

作品の詳細（作家別・抜粋）

（1）寄贈

1　鈴木竹柏《烟雨》
1976（昭和51）年
紙本着色　186.0×194.0

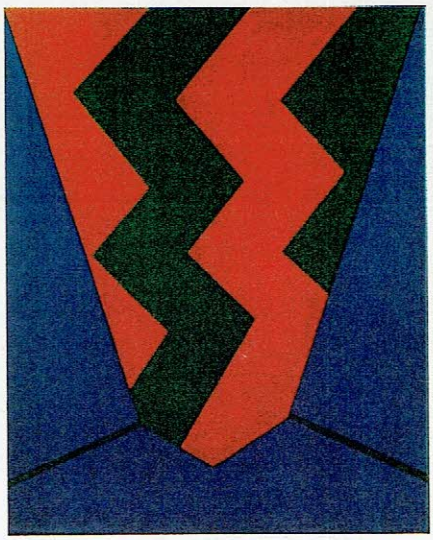


2　鈴木竹柏《耀》
1995（平成7）年
紙本着色　158.0×218.0

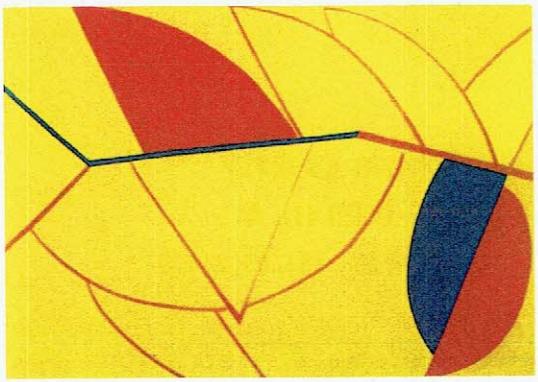
3　鈴木竹柏《夕晴れ》
1966（昭和41）年
紙本着色　151.0×214.0

鈴木竹柏　すずき・ちくはく　1918（大正7）～2020（令和2）年
神奈川県三浦郡逗子町（現・逗子市）生まれ。逗子開成中学校を卒業後、1937（昭和12）年に中村岳陵の内弟子となり、1949年まで起居をともにする。1938年、第25回院展に初入選。戦後は師の転属に伴い日展を発表の場とし、1956年第12回日展に出品した《暮色》により初の特選、白寿賞を受賞。1997年から99年まで日展理事長、その後は顧問をつとめた。1991（平成3）年に日本芸術院会員、2007年に文化功労者となった。

4　淀井彩子
《シャッムンナシームの祭り（そよ風の匂い）》
1975（昭和 50）年
油彩・画布　163.0×131.0



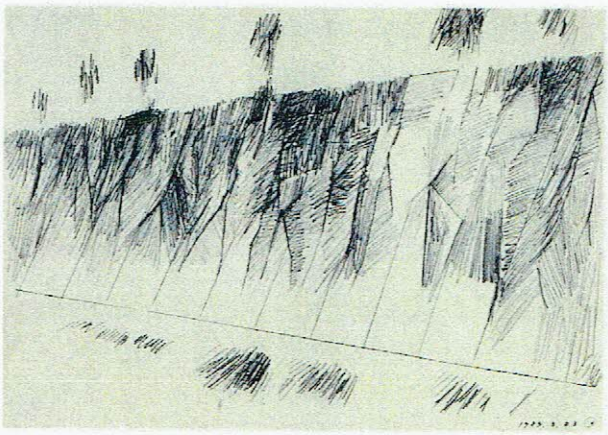
5　淀井彩子《SOUTH Ⅰ.》
1981（昭和 56）年
油彩・画布　112.1×162.1



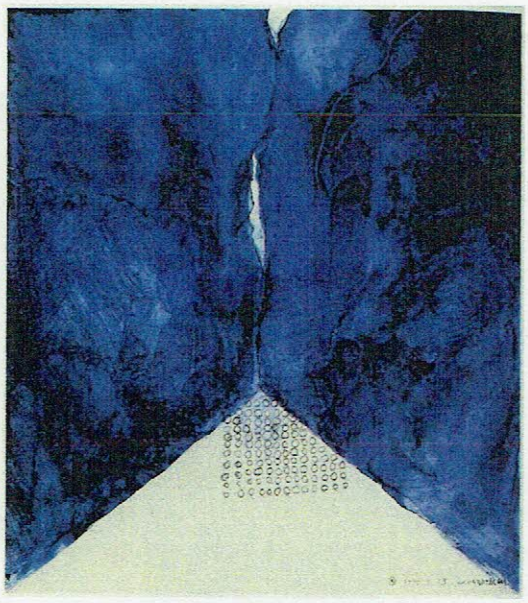
淀井彩子　よどい・あやこ　1943（昭和 18）～
東京生まれ。父は彫刻家の淀井敏夫。東京藝術大学卒業後、同大学院美術研究科油画専攻を 1968（昭和 43）年に修了。同年よりフランス政府給費留学生としてパリ国立美術学校に 2 年間留学。その際旅行したエジプトの印象をもとに、「エジプト」シリーズの制作をはじめる。1971 年、彫刻家の若林奮と結婚。移り住んだ武蔵野の風土、歴史から、縄文土器や石鏃をモチーフとするようになる。1973 年には、若林の在外研修に同行し、フランス、スペインの旧石器時代の遺跡を視察。土地の記憶をテーマとした、大胆で生命感あふれる作品を制作している。

6　若林奮〈89-25〉ほか　Valleys 関連ドローイング　160 点　より抜粋

6-1〈89-25〉
1989（平成元）年
鉛筆・紙　25.6×36.0

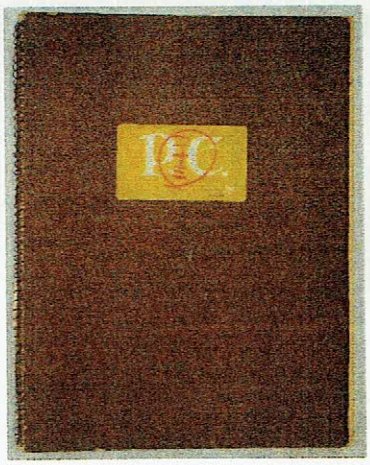


6-152〈99-128〉
1999（平成 11）年
色鉛筆、鉛筆、水彩・紙　24.3×20.8

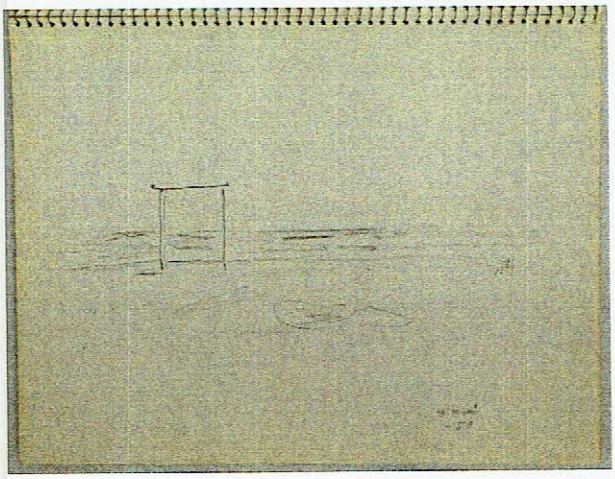


若林奮　わかばやし・いさむ　1936（昭和 11）～2003（平成 15）
東京生まれ。1959（昭和 34）年、東京藝術大学美術学部彫刻科を卒業。翌 1960 年の二科展で二科 45 周年記念賞を受賞し、1963 年に会員となる。1969 年大阪万博に《3.25m のクロバエの羽根》を展示。1973 年、神奈川県立近代美術館で個展を開催するとともに、文化庁芸術家在外研究員として渡仏。南フランスの旧石器時代の遺跡や、エジプトの古代遺跡を訪れる。こうした留学中の体験と、自分と対象の間を満たす空間についての考察が、「振動尺」などのシリーズを生んだ。1980 年と 1986 年にヴェネツィア・ビエンナーレに出品。1989 年、田浦のアキライケダギャラリーでの個展で発表された《VALLEYS》は、横須賀美術館の開館に先んじて寄贈され、前庭に設置されている。

7　森芳雄　スケッチブック
1950（昭和 25）年頃
鉛筆、コンテ・紙　40.0×33.6

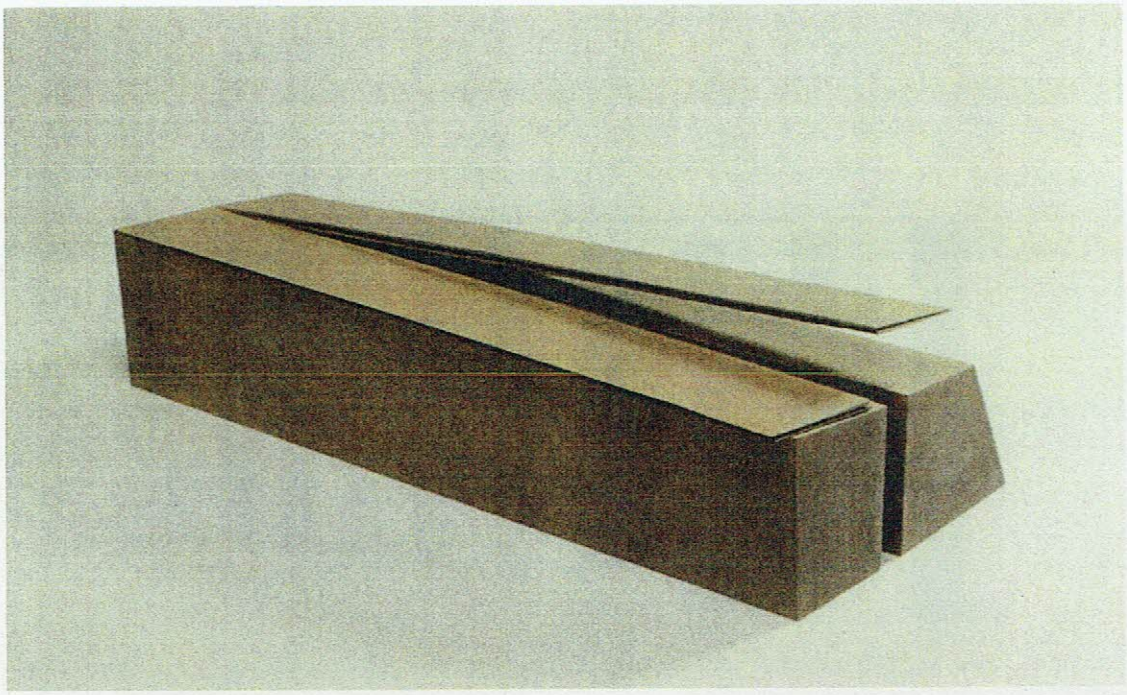


（内容例）
〈無題［冬の海岸］〉



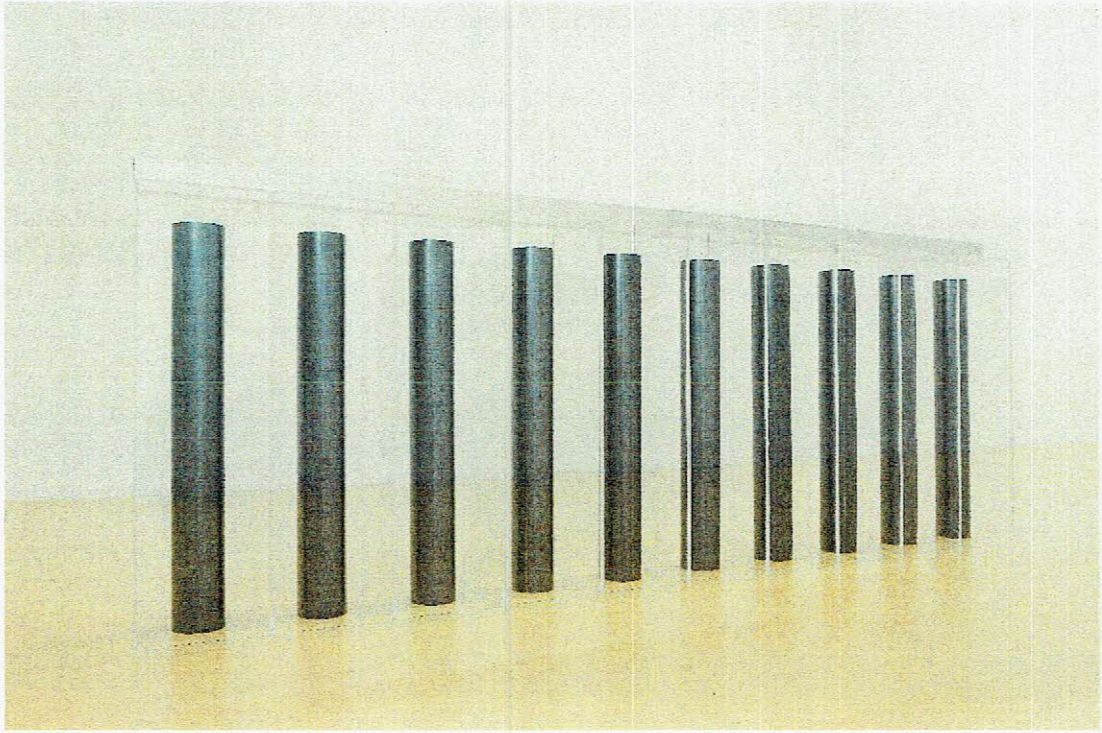
森芳雄　もり・よしお　1908（明治 41）年～1997（平成 9）年
東京生まれ。1923（大正 12）年慶応義塾普通部在学中から白瀧幾之助に石膏デッサンを学ぶ。1926 年からは本郷絵画研究所に通う。1928（昭和 3）年一九三〇年協会洋画研究所で中山巍に師事し、翌年第 4 回一九三〇年協会展に初入選。次いで二科展、独立展にも入選した。1931 年に渡仏し、今泉篤男、山口薫、浜口陽三らと交流。サロン・ドートンヌに入選を果たし、1934 年に帰国。独立展に出品するが、1939 年の出品を最後に同会を退会、同年第 3 回自由美術家協会に出品、同会会員となる。戦後の 1951 年から武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）で後進の指導にあたった。1964 年、麻生三郎、糸園和三郎、寺田政明らと自由美術協会を退会し、主体美術協会を結成してその代表となった。

8　土谷武《蝉　V》
1982（昭和 57）年
コルテン鋼　17.0×60.0×28.5



土谷武　つちたに・たけし　1926（大正 15）～2004（平成 16）
京都市生まれ。生家は清水七兵衛を先祖とする窯元。1939（昭和 14）年、京都市立美術工芸学校彫刻科に入学、同校補修科を修了後、1944 年東京美術学校彫刻科に入学した。1949 年に同校を卒業、同じ年、世田谷区宮坂に友人たちと共同で「アトリエ・ド・ムードン」を建て制作する。1957 年より新制作協会会員。当初の人物像等の具象から、滞仏（1961～63 年）を経て、抽象表現に転向。渡仏前より、日本大学で非常勤講師をつとめ、1968 年に多摩美術大学彫刻科教授となる（～73 年）。その後、75 年からはふたたび日本大学で教鞭をとる（～96 年）。1983 年、第 17 回サンパウロ・ビエンナーレに出品。1998（平成 10）年、東京国立近代美術館ほかで本格的な回顧展を開催した。

9　高木修《Untitled》
2000（平成12）年
アクリル、鉄、アルミニウム　150.0×401.0×40.0



高木修　たかぎ・しゅう　1944（昭和19）年～
栃木県生まれ。建築雑誌の編集を行いながら、1971年、高松次郎の主宰する「塾」で学び、創作活動を始める。翌年には、哲学者の市川浩にも師事する。金属を主とした、空間と身体との相互関係を意識した立体造形作品を発表するほか、グループ〈361°＋インターセクト〉で自らの身体を使ったパフォーマンスや様々なプロジェクトを行う。1996年からは、横須賀市に移り住み、個展と美術家集団〈ABST〉を中心に活動を行っている。
主な出品展覧会
「現代美術の視点―メタファーとシンボル展」1984年、東京国立近代美術館
「高木修展　特異な空間へ」2016年、栃木県立美術館

10-1　高田安規子・政子
《修復（中庭）》
2019（平成31）年
（写真）50.9×76.5

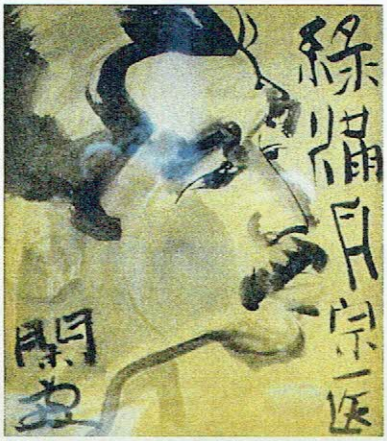
10-2　高田安規子・政子
《修復（通路）》
2019（平成31）年
（写真）50.9×76.5

高田安規子・政子　たかだ・あきこ／まさこ　1978（昭和53）年～
東京生まれ。一卵性双生児の姉妹であり、ユニットとして活動している。2001（平成13）年に姉・安規子が多摩美術大学美術学科を、妹・政子が東京造形大学美術学部比較造形学科を卒業後、ともにロンドン大学スレード校美術学部で学ぶ。2009年、世田谷区芸術アワードを受賞。その手法は、洗濯ばさみを材料とした脚立のように、固有の大きさを持つものに加工し、まったく別のスケール感のものに見立てて再提示するもの。「修復」は、建築物に反復的に用いられている素材をスケールダウンしたうえで、破損箇所の修復に用いるインスタレーションのシリーズであり、東京都現代美術館に作例（2014）がある。
主な出品展覧会
「MOTアニュアル2014 フラグメント」2014年、東京都現代美術館
「装飾は流転する」2017年、東京都庭園美術館

11　朝井閑右衛門《鍾馗之図》
1946（昭和 21）年頃
紙本墨画　135.0×59.0

朝井閑右衛門　あさい・かんえもん　1901（明治 34）～1983（昭和 58）
大阪府生まれ。1919（大正 8）年に上京、本郷洋画研究所に学び、斎藤与里に師事。1926 年、第 3 回二科展に初入選。1936（昭和 11）年、文展鑑査展に大作《丘の上》を出品し文部大臣賞を受け、翌 1937 年、光風会会員となる。日中戦争下、数度にわたり中国にわたって制作し、終戦を上海で迎える。引き揚げ後は友人宅を転々とするなか、一時は横須賀・汐入の副島医院に寄寓。その後、副島医師の紹介により、1947 年に田浦の二軒長屋に落ち着き、アトリエ兼住居として、1966 年に鎌倉に転居するまで過ごした。

12　朝井閑右衛門《副島昇像》
1946（昭和 20）年頃
墨・紙　27.0×23.5



13　朝井閑右衛門《副島昇像》
1946（昭和 20）年頃
墨・紙　27.0×23.5

＊14～18 は資料のため、省略します。

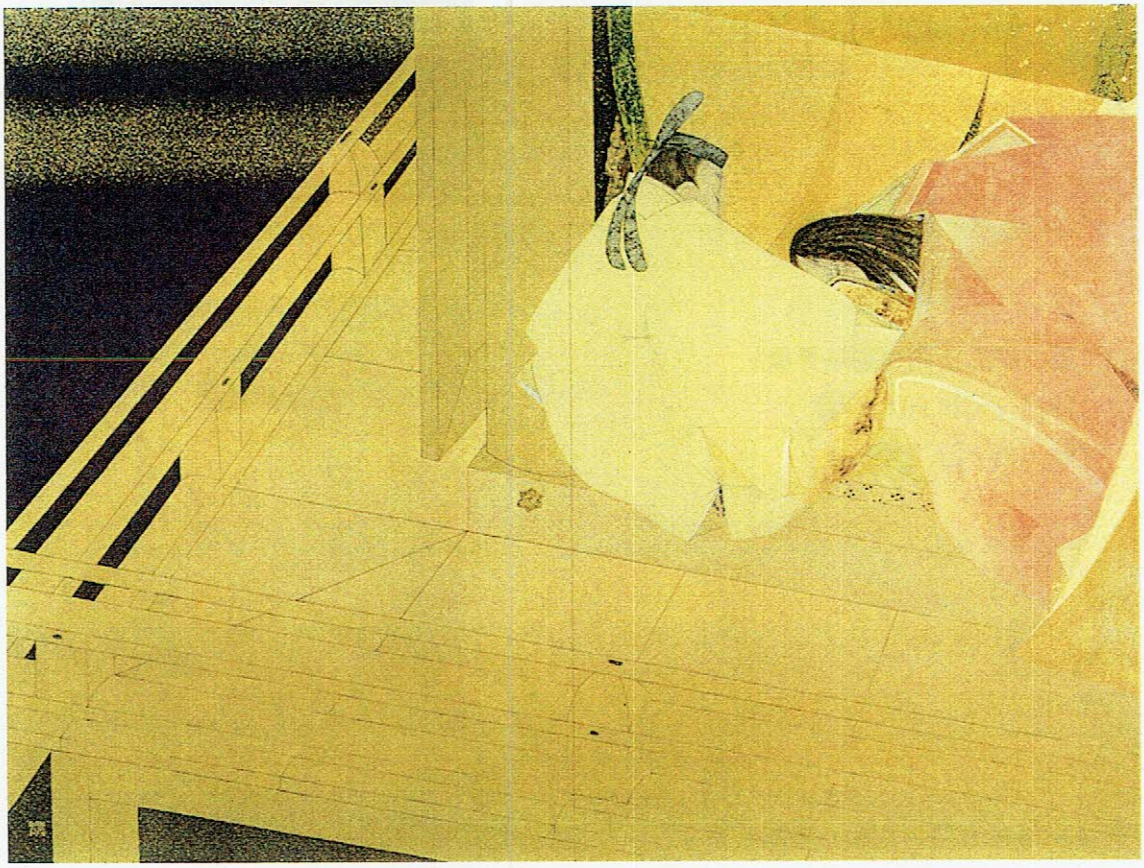
（２）所管替

（秘書課より所管替）

19　月岡榮貴《逢瀬（源氏物語）》

1983（昭和 58）年

紙本着色　188.5×248.5

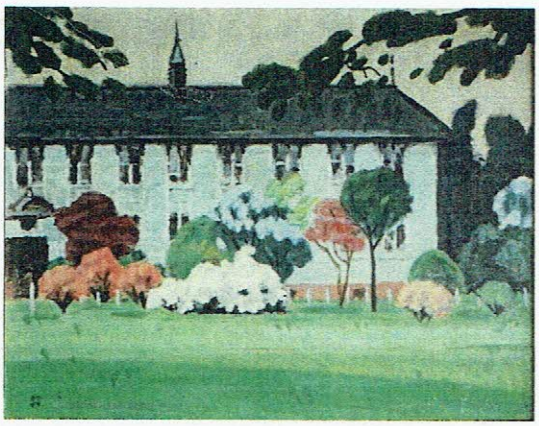


月岡榮貴　つきおか・えいき　1916（大正 5）～1997（平成 9）

東京・浅草生まれ。本名・英吉。太平洋美術学校で学んだ後、東京美術学校で結城素明に師事。1942（昭和 17）年に同校を繰り上げ卒業後、前田青邨に師事し、1948 年より院展に出品。青邨門下として、1967 年の法隆寺金堂壁画、1972 年からの高松塚古墳壁画模写事業に参加。1981 年の院展に出品した《やまたのおろち（古事記より）》が日本美術院賞を受賞、同人となる。歴史や物語を主題とするいっぽうで、現代的な力強い女性像を数多く描いた。1963 年以来葉山町に在住し、没後、遺族により多くの作品が横須賀市に寄贈された。

（南処理工場より所管替）

20　猪瀬踏花《北の春》
1966（昭和 41）年頃
油彩・画布　91.0×116.5



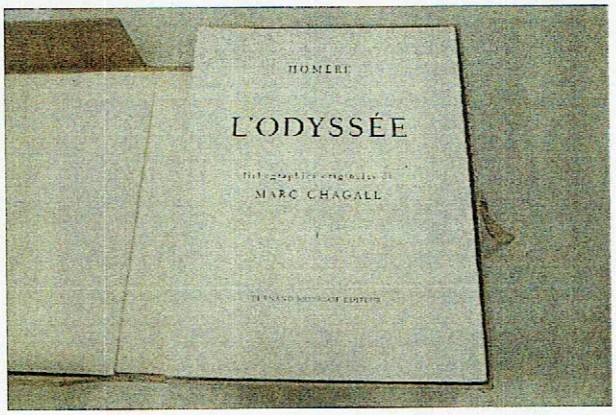
22　猪瀬踏花《犬吠埼》
制作年不詳
油彩・画布　52.0×60.6

猪瀬踏花　いのせ・とうか　1907（明治 40）～没年不詳
東京生まれ。本名・正。1925（大正 14）年、逗子開成中学校卒業、翌 1926 年、神奈川県師範学校卒業（中卒者は 1 年制）。独学で絵を学び、1931（昭和 6）年の第 1 回独立展に入選。ほかに春陽会展（第 12、21 回）、二科展（第 28 回）に「猪瀬正」名義での出品歴がある。また 1932 年、さいか屋で初の個展を開いた。戦後は中村琢二に私淑し、「猪瀬踏花」名義で 1949 年の第 5 回日展に入選。以後、日展、一水会展、県展等に出品し、1958 年に一水会会員に推薦される（1973 年に退会）。1967 年にヨーロッパを訪れ、以後イタリアを中心にたびたび外遊したという。
史料を追うかぎり 1946 年～1978 年にかけて、横須賀市田浦町に在住しており、1978 年には横須賀市市制施行 70 周年を記念して出版された画文集『横須賀風物 100 選』に《横須賀港と臨海公園》（6 号）を寄せた。

＊21 猪瀬踏花《池畔残雪（横浜三渓園）》は、保存状態が悪いため、受入不可とされた。

（３）美術館図書室資料から美術作品扱いに変更

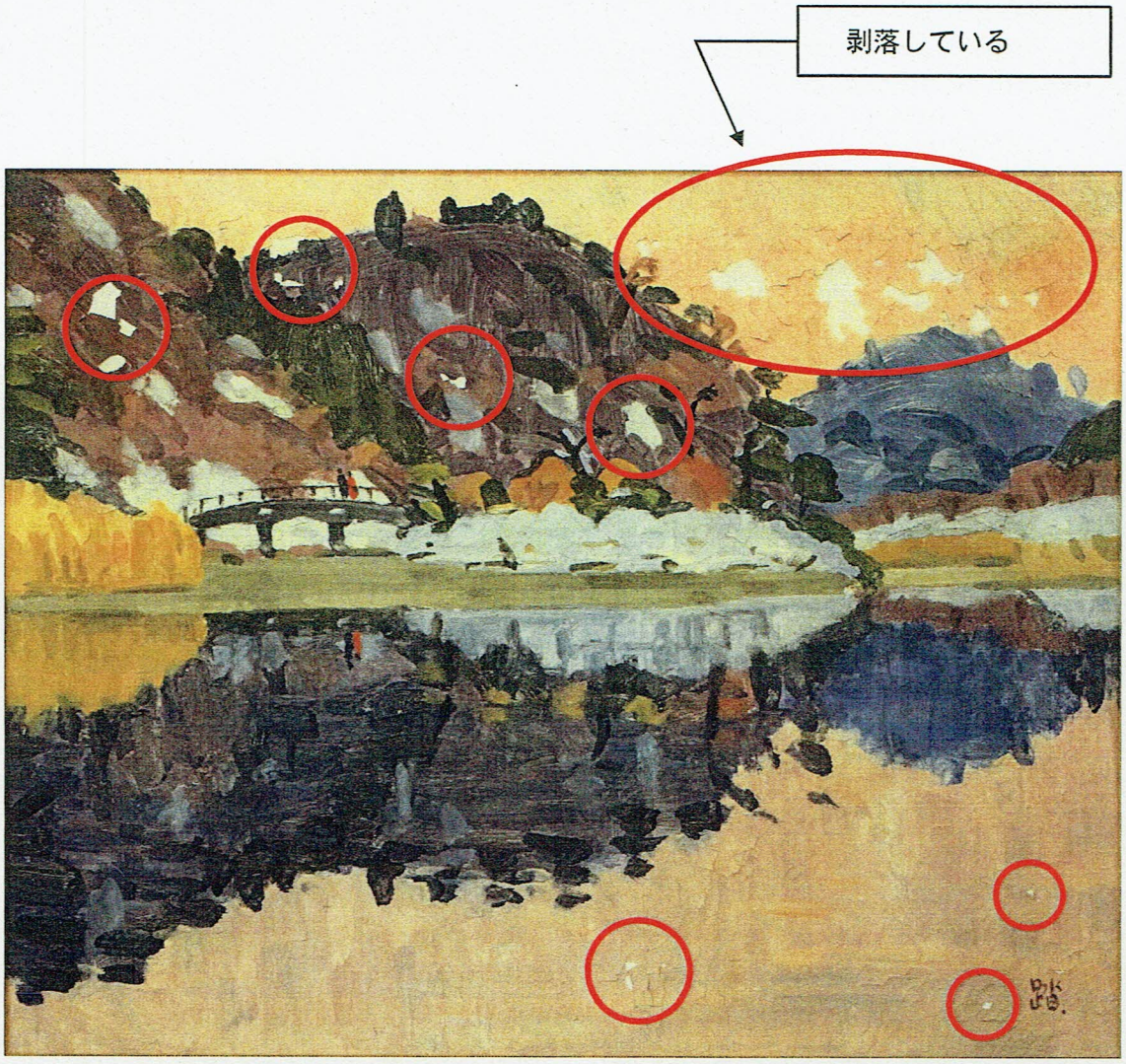
23　シャガール，マルク《オデュッセイア　全２巻》
1974-75 年刊
リトグラフ・アルシュ紙



（内容例）
〈扉絵（第１巻）〉
1974 年刊
リトグラフ・アルシュ紙　52.5×37.5

シャガール，マルク　CHAGALL, Marc　1887～1985
ロシア領（現・ベラルーシ共和国）ヴィテブスク生まれのユダヤ人。サンクトペテルブルクで舞台美術家レオン・バクストに師事したのち、1910 年から 5 年間パリに滞在。第一次大戦中はヴィテブスクにとどまり、10 月革命後、同地に美術学校を開いて指導する。この間、ロシア・アヴァンギャルドに参加するが、1922 年に出国。ベルリンを経由してパリに戻り、エコール・ド・パリを代表する画家のひとりとして活躍する。1941 年、ナチスの迫害を避けてアメリカに亡命。戦後は再びパリに戻り、フランス国籍を取得した。1950 年、マーグ画廊での個展に際し、ムルロ工房でポスターを制作したことを契機として、リトグラフの制作にも精力的に取り組むようになった。

（追補）受入不可とされた作品



21　猪瀬踏花《池畔残雪（横浜三渓園）》
制作年不詳
油彩・画布　53.0×65.3